

令和元年度緑のボランティア活動に関する

指導者育成委員会（第1回）

議事録

○松岡緑環境課長 それでは、これより令和元年度第1回「緑のボランティア活動に関する指導者育成委員会」を開催いたします。

本日は、御多忙のところをお集まりいただきまして、まことにありがとうございます。

また、委員の就任を御快諾いただきまして、まことにありがとうございます。

今年度より2年間の任期となりますけれども、委員の先生方には、貴重な御意見を頂戴したいと思っております。

まず、委員の先生方を御紹介させていただきます。

初めに、一般財団法人セブン・イレブン記念財団地域活動支援事業マネジャーの小野委員でございます。

○小野委員 小野です。よろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 国際環境NGO FoE Japan総務部部長・理事の篠原委員でございます。

○篠原委員 篠原です。よろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 公益財団法人日本自然保護協会自然保護部市民活動推進室室長の高川委員でございます。

○高川委員 高川と申します。よろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 特定非営利活動法人自然環境アカデミー専務理事・事務局長の野村委員でございます。

○野村委員 野村です。よろしくお願いいたします。

○松岡緑環境課長 本日は、柳川委員が所用のため欠席されるということですので、よろしくお願いいたします。なお、事務局からは私、緑環境課長の松岡、保全担当課長代理の平野、保全担当主事の桐山の3名が出席いたします。どうぞよろしくお願いいたします。

これから座って失礼いたします。

続いて、座長選任に移らせていただきます。

座長をお引き受けくださる委員の方はいらっしゃいますでしょうか。

それでは、事務局からの提案なのでございますけれども、野村委員を座長にお願いしたいと考えておりますが、皆様、いかがでしょうか。

(「異議なし」と声あり)

○松岡緑環境課長 ありがとうございます。

それでは、野村委員、申しわけございませんが、座長席のほうに御移動願えますでしょうか。

(野村委員、座長席へ移動)

○松岡緑環境課長 また、本日の議題について御意見をいただいた後になりますけれども、講座を受講しました指導者の活躍の場につきまして、今後検討していく予定の事項につきまして後ほど御説明を申し上げます。

それでは早速ですが、野村座長より本日の議事進行についてよろしくお願ひいたします。

○野村座長 いきなり座長に御指名いただいて、私も甚だ不安なのですがけれども、何とか全うしていきたいと思っておりますので、きょうの会議、よろしくお願ひいたします。

なかなか不慣れなもので、皆さんの御協力でスムーズな進行をよろしくお願ひいたします。

それでは、本日の内容は4つあるということなのですが、まず「緑のボランティア指導者育成講座概要」「平成29年度の講習の実績報告」のほうを、事務局から説明をお願ひいたしたいと思っております。よろしくお願ひします。

○事務局 それでは、資料1の「緑のボランティア指導者育成講座概要」をご覧ください。

当講座は、緑のボランティア活動を行う都民の自主的な活動を支援、促進していくために、自然観察や緑地保全などの知識や技術を持つ指導者を育成することを目的としております。東京都では、ボランティア人材の高齢化などの課題を踏まえまして、新たなボランティア人材の掘り起こしと定着に取り組んでいるところでございますが、こうした指導者への適切な指導ができる人材が必要であり、また、ボランティア活動の活性化に向け、ボランティア団体の運営や立ち上げができる人材を必要としてきました。

そういった人材を育成する目的で行っているのが当講座になります。講座は基礎講習と専門講習がございまして、基礎講習は、基礎的な指導や単発的な企画の立案などができる程度の指導者を育成することを目指して、水準を設定しております。また、専門講習は、高度に専門的な指導、継続的な企画の立案などができる程度の指導者育成を目指しております。

講座受講から認定までの流れについて説明を申し上げます。基礎講習は、18歳以上の方で、都内で緑のボランティア活動経験が年10日以上、かつ、1年以上の実績がある方を対象にしています。36時間の講習を8割以上受講し、修了試験に合格した方を2級指導者として認定しています。

専門講習は、2級指導者が受講対象となります。60時間の講習を8割以上受講しまして、修了試験に合格した方で、都内の緑のボランティア経験が年20日以上、かつ、3年以上の実績がある方を1級指導者として認定しております。1級指導者の認定に当たっては、委員会の中で議論していただくこととなります。

簡単ではありますが、緑のボランティア指導者育成講座の概要説明を終わります。

○野村座長 まず、この講座の概要の説明について、委員の先生方から何か御意見とか御質問はございますか。

○高川委員 大丈夫です。

○野村座長 小野さん、どうぞ。

○小野委員 18歳以上の定義というのは固定なのですか。私はわからないですけれども、高校生とか若者も対象にしたような形というのではなく、成人の定義もあるかもしれないですが、18歳以上というのが定義になっているのですね。

変えようということではないですけれども、理由は何かというと、私も資料を先ほどさっと見たのですが、資料4の「年代別構成」のところで60代がメインで、若者というものが無いのです。だったら、若者の人材育成も含めてという考えで、この18歳というのがどういう定義でなっているのかなと思ったのです。余り乱したくはないです。

多分、ボランティアの受け入れとかをしていると思うのですけれども、若者のそういうものは余りないのでしょうか。

○野村座長 私のやっている活動の中ですけれども、ボランティアとしての活動を希望される方は中学生とか高校生もちろんいますので、ボランティア全般で言えばふえてきている、かえって関心は高まっているのかなと思うのですけれども、ここで言う指導者ということになるとどうなのでしょうね。

○小野委員 そうです。指導者養成の指導者という定義のところで、そこに入るのか。実例で言うと、少しお話しした高尾の森自然学校というところをうちも東京都の環境局さんと一緒にやっているのですけれども、そのところに小学生のときから毎週ボランティアで来る子供がいるのですよ。今は中学生になりました。ああいう彼らが興味を持っている中で、指導者という定義なのかどうかはわからないですけれども、こういう養成講座のところに入れる余地があるのかな、どうなのかなと私も聞いていた中で思ったのです。ですから、その年齢の定義という部分のところ固定としてなっているのだったら仕方がないけれども、逆にこの年代構成を見ると50代後半ぐらいからが7～8割のところを考えると、若者にも門戸を広げてあげるというのも一つのあれなのかなと思ったのです。

ほかの実例で、何かというと、私がかかわっている財団のところで海外研修というNPOのリーダー育成をやっているのですけれども、そのところで御存じかもしれませんが、ドイツのNABUという50万人の会員団体なのです。小学生のころからボランティアをやって、講座

も中にあるのですよ。そうだとすると、そういう層があるからこそ、今の年齢層のところでの高齢化という形ではなく、平均化まではいかないですけども、若者を取り込むということがあったならば、指導者という定義のところではまるのかどうかというのは私もわかりませんが、こういう育成の講座の中に入れる余地があるのだったら、条件を満たせば入ってもいいのではないのかなとは思いますが、どうなのでしょう。事務局側の意見も聞きたいのです。

○松岡緑環境課長 規則とかで入っていないようなので、そこは要綱で決めているので、それを変えればできないことはないと思うのですが、今、野村座長もおっしゃったとおり、指導者としてどうかということもあるかと思うので、条例上は9条のところ「普及啓発、技術指導等を行う指導者を育成するよう努める」となっております。技術指導を行うような方が18歳未満の方でできるかということになるかと思うので、当初は18歳以上のある程度。

○小野委員 常識を持ったというような。

○松岡緑環境課長 常識というか、一般的に指導者としてなりそうな方を想定していたのだろうと思うのです。

○小野委員 わかりました。

○野村座長 別に考えたいという感じがしますね。若者をもっと取り込むというか、それはそれでやっていくべきことかなという感じがしますが、この枠組みの中でできるかどうか。緑のボランティア指導者育成講座自体が、緑地保全などをやっていくことの一つの事業なわけですよ。この中でできるかというのが、もうちょっと違う枠組みになってしまうのかなという感じがします。

○小野委員 逆に20歳というのではなくて、18歳と落としているぐらいでもまだ広くとっているという解釈でいいですか。

○野村座長 実際にそれで18歳以上なのに、参加者としては20代すらいないというところですよ。できれば若い人にもという意図はありますよね。

○松岡緑環境課長 あります。

○野村座長 この現状で広げられるところまではいかないのかなという感じがちょっとしましたけれども、もう少し若い人がいて、もっと促せばできるのかなというぐらいのところだったら、広げたいというのはあるかもしれないのですが、現状で30代、40代はほとんどいないわけですね。

○小野委員 人口比で考えて、時間の使い方を考えると、60代がトップになるのはわかるの

ですけれども、30代で1人というのは余りにも寂しいもので、それこそ皆さんのようにNPOというところで若手人材を育成する養成講座を通してNPOのほうに入っていきような流れではないですが、そういうものも必要なのかなとは思ったのです。

○野村座長 この問題は、後の中身のところで議論するときに振り返って出てきてしまうことかなというふうにも思いますので、またほかのこととあわせて議論したいなと思います。よろしいでしょうか。

どうぞ。

○高川委員 可能だったらお答えいただきたいのですけれども、有料講習だと思うのですが、なぜ有料かというのと、もし内訳があるのだったら教えていただきたいのです。

○松岡緑環境課長 講座が有料という意味ですね。

○高川委員 そうです。

○小野委員 値段が余り出ていなかったのですけれども、幾らぐらいなのか。

○事務局 資料の中に金額が書いてあるものがございます。

○小野委員 何番目ぐらいか。

○事務局 資料8です。基礎が1万4400円、専門が2万4500円になります。時間当たりの単価を決めてございまして、この講座が1時間当たり幾らというもので、掛ける何時間というところで金額は算出しております。講座を受講するに当たって、外部の講師の方々に講師謝礼金等をお支払いしておりますので、そういったところを賄う意味で費用の設定はさせていただきます。

○高川委員 ありがとうございます。

○野村座長 これは、規定みたいなものがある程度あるのですか。局が違くとあれなのかもしれないですけれども、同じ局の中で同じような講座をやっていて、時間当たり幾らというものはある程度の決まりがあるのですか。

○事務局 この講座自体の単価表というものを作成してございまして、それをもとに計算しております。

○小野委員 逆に高いというのですか。

○高川委員 ただ聞きたかっただけです。妥当だと思います。

○事務局 自然公園もレンジャー講習会みたいなものを行っているのですけれども、そちらは外部講師がほとんどいなくて、職員やレンジャーが教えているので、単価がもっと安かったりというのもあるので、基本は外部講師を入れているからこの値段ということなのです。

○高川委員 基礎講習で、36時間ということでもいいのでしょうか。

○松岡緑環境課長 そうです。

○高川委員 安いと思います。

○小野委員 後の話かもしれないですけども、値段設定はこのままで行く方向ですか。

○事務局 また後にも出てくるのですけれども、外部講師を呼んでこの時間数を確保していくとなると、金額を下げることに、変更するのは難しいかと思うのですが、逆に外部講師を呼ぶ時間が減って職員が指導するとか、参加してくださる方々で自主的に取り組んでいただくといった時間配分になってくると、その分の費用が減額されますので、そういった変更は今後発生する可能性があります。

○小野委員 これは、後で話したほうがいいですか。

○野村委員 そうですね。そうなってくると、あとは。

○高川委員 やりようは、いろいろあると思いますからね。

○野村座長 中身の話にもなってくると思いますので、ここは後にしましょう。

「平成29年度の講習実績報告」については、資料2をもとに事務局のほうから御説明をいただければと思います。

○事務局 資料2から資料6までまとめて説明させていただきます。

まず、平成29年度の基礎講習について報告いたします。

平成29年6月から9月までの4カ月間にわたって、8日間、合計36時間の基礎講習を行いました。

スケジュールは資料2の表のとおりでして、特段の延期等もなく、予定どおりに開催いたしました。表には受講生のアンケート結果もあわせて記載しておりますが、これは後ほど今後の講座の方向性を説明する際に触れさせていただきます。

資料2とあわせて、資料3をごらんください。講座の内容は過去の講習アンケートや委員会による指摘を踏まえて決定しております。基礎講習の平成29年度の見直しについて、実習の充実というものを図っております。平成24年度から平成26年度までの基礎講習、専門講習修了者に対して行ったアンケートの中でも、約4割の方が実習時間の増加を希望すると回答しておりました。

また、平成27年度の育成委員会におきましても、より実践的な講習をふやす必要があるとの御指摘をいただきました。そこで改正点としまして、指導法の基本という講座を座学から実習へと変更しました。これは、都庁内で講義方式により行っていたものを小峰公園の実

習という形に変えることで対応いたしました。平成29年度の講習は実習が23時間となり、講習8日間のうち5日間で実習を行っております。

次に平成29年度の受講状況です。資料4をごらんください。平成29年度は25名が基礎講習を受講されました。平均年齢は60代が一番多く、男女比率としても男性のほうが多いという傾向はおおむね従来どおりです。ただし、平成29年度は区部からの参加者が大きく増加いたしました。

表は受講者の詳細になります。網かけされている部分が保全地域のボランティアであったり、体験プログラムの経験者をあらわしております。こういった方が6名いらっしゃいました。また、既にボランティア団体に所属されているという方が多く、身近な緑地や公園、保全地域で緑地保全活動や自然観察を行っているという方が多くなっております。

続きまして、平成29年度の専門講習について報告いたします。専門講習は10月から2月の5カ月の間で10日間、合計49時間行っております。例年どおり2コース設置しており、自然観察・体験活動コース、緑地保全活動コースの2つから選んでいただきます。重複して受講するという方もいらっしゃいます。

資料5の①が両コースの共通の科目、資料5の②が各コースの選択者が受講する科目になっております。専門講習の時間数は各コース60時間と要綱で定まっておりますが、平成29年度から49時間分の科目に加えて、実践活動というものを11時間導入いたしました。実践活動については後ほどより詳しく説明いたします。

日程表は記載されているとおりでして、雨による延期が一度あったことを除いて、スケジュールどおりとり行いました。この講習の対象者は2級の認定者で、今年度か過年度かにはこだわらず、基礎を受けた方のみが受講することが可能となっております。

平成29年度の専門講習については、内容を大幅に変更しております。資料6の①をごらんください。変更の1点目は実習の拡充です。平成29年度は2コース、それぞれ1科目ずつ座学を実習に変更しており、「企業や学校との体験活動」という科目や「コミュニケーション技術・参加者への伝え方」という科目を座学から実習へと変更いたしました。

また、今までの講習のアンケート結果も踏まえて、見直しが必要な科目で集約可能な科目を統合、整理をしてみました。例えば「効果的な広報」は「行政との協働」へ統合されております。これらの統合の結果、講習時間を11時間圧縮することができましたので、浮いた11時間を実践活動に充てることにいたしました。

ここで実践活動の説明に入らせていただきます。資料6の②をごらんください。これは受

講者アンケートにて講習時間の長さが指摘されたため、その解決策として導入した制度になります。講座の受講者には、テーマを選択して、イベントの企画やボランティア団体の活動計画の策定をしてもらいます。

この企画などについては、受講者が好きな時間、好きな場所で取り組むことができるため、受講に当たっての負担を軽減しております。平成29年度は、「自然観察・体験活動又は保全活動の企画及び実践」、もしくは「安全管理や事業管理など、組織運営に関する計画作成と実践」、この2つのテーマから好きなほうを選択して、実施研究、調査を行ってもらいました。

講習の流れ、実践活動がどのように進んでいくのかをイメージ図であらわしております。ガイダンス初回の講座のときに実践活動の目的や方法などを説明し、それから受講生は各自実践活動を実施していただき相談会を2回設けました。この相談会は12月と1月に行っております。最終日の2月4日に受講生が成果発表を行い、振り返りを行っております。

その下に示している表が、実践活動の成果として受講生が企画した題材の一覧です。相談会による定期的なフォローアップの効果もありまして、11名中8名が実践を前提とした企画立案や活動計画の見直しを実施いたしました。これにより上級指導者に求められる活動等の企画力を醸成することができ、狙いどおりの人物像の育成を達成することができたと考えております。

また、実践活動制度の導入によりまして、企画の実施に向けて受講生が所属団体の会員と組織運営について話し合いを行ったり、講座の知識を共有したりすることなどが生じまして、現場での調整能力を身につける機会が創出されたことがわかります。

以上が、平成29年度指導者育成講座の実績報告になります。

○野村座長 ありがとうございます。

まずは、今までやったことについての報告のところでは御質問等はございますか。

○小野委員 質問ということではないのですが、資料5の①のアンケート結果のところで言うと、内容なのか、講師なのかちょっとわかりませんが、満足度の開きがいっぱいあるなと思っているのですよね。私もいろいろなNPOの人と一緒にやって、マーケティング上で見ると、緑色の普通というのはマイナスなのですよね。普通というのは普通なのです。どこにでもあるということなのですよ。一番満足している青色の「満足」というのは高評価なのですよね。そうすると、青色の人が口コミでこの制度を言ってくれる可能性があるのですよ。「ある程度満足」はよかったかなという程度なのですよね。そうすると、青色のどこ

ろの開きを見ると、結構いいところもあれば、少ないところもあるのかな、これは何が原因でなっているのかわかれば、PDCAではないですけども、回せるのではないのかなと思うのです。

○野村座長 まず、私もお聞きしたいのですけれども、今のことも絡むのですが、どういう人に来てもらいたいかという思いが事務局のほうにあると思うのですよね。それで狙った人が来ているのか、それとも、ちょっとそうではない部分があるのか。

あと、講座を受けて、こうなってほしいというところが狙いどおりにいつているのか。もしかしら既にそういう資質をお持ちの方が参加していて、先ほどちょっと説明にあった資料6の②の「実践活動の導入」のところで、いろいろ企画をしてくださいましたというのがありましたけれども、これはもともとそういう企画をするのがある程度できるというか、好きな方が既に来ているとすると、これも講座を受けたから変わったと見るのか、もともとそういう人が来ていたのか、その辺のところですか。そういうところにかかわってくる話なのかなと思うのです。

もちろん今までやったもののアンケートなどもそうですけれども、捉えるところをきちんと捉えないと、次にどうしたいのかなというのがずれていってしまう可能性があるのかなと思うのです。

○小野委員 PDCAのチェックができないですね。

これはアンケートをとったときに、記述式の項目というのはなかったのですか。全部5段階評価ですか。

○事務局 設問ごとに満足度、どれを選んだか、それに対する理由みたいなものはないのですけれども、講義ごとに感想を書く欄がございまして、そこを丁寧に拾っていけば傾向が見えてくる可能性はあります。

アンケートをとるに当たって、この項目もとっておいたほうがよかったなと思うのが、この講座を受けるに当たって、どういったことを期待して受講を決められたのかという項目を今までとっていなかったもので、どういった講座を求めて来られているのかというところを把握するためには、最初にそういった設問を振ったほうがよかったなと思っております。

○小野委員 やったほうがいいですね。

○事務局 はい。次回以降はそういったところの調査も含めてやっていきたいと思っております。

○松岡緑環境課長 後でお話ししようかと思っていたのですけれども、今回平成29年度に受

けていただいた方々に対して、さらに追加のアンケートをしようかと思っていましたので、今、おっしゃったようなことも含めて、もうちょっとその辺の分析もあわせてアンケートの中で聞いていけたらなど。ただ、2年ぐらい前の話なので、今になって聞かれてもと思う方もいらっしゃるかもしれないですけども、そういう方々にも今回調査をアンケートとしてやろうかなとは思っています。

それから、先ほど野村先生からおっしゃっていただいた件については、最後に出口戦略的などころでお話ししようかと思っていたのですが、その議論のために必要だということであるので、今御説明します。

○事務局 基本的にこれを受けていただいた人に今後どういうふうに活躍していったきたいかとか、どういう役割を担っていったきたいという思いでこの事業を始めたのかということなのですけども、もともと平成13年あたりに条例を大きく改正したときから指導者育成講座というものを始めているのですが、基本的に私たちは保全地域を東京都として維持管理して、保全していくというところが同じ係でやっている事業なのです。

保全地域が今は50地域あるのですけれども、順次少しずつふえてきて50なのですが、その保全地域というフィールドで、ボランティアさんが自然発生的に立ち上がっている保全地域と立ち上がっていない保全地域というのが当時あって、行政でできることというの、なかなかお金をかけてできる場所も限りがあるので、できれば保全の一端をボランティア団体の方々に担っていただいて、活動してほしいというところが一つあって、ある地域でのボランティア団体の立ち上げの中心的な役割を担ってほしいというのが一つありました。

あとは、既に立ち上がっているボランティア団体の中でも、世代は交代していきますし、指導者が少数よりはなるべく多くいていただいたほうが大規模な企画もできると思いますので、その団体の中でも順次指導者が立ち上がっていただくという形が望ましいかなというものが2つ目です。

最近では、生物多様性といった考え方が主流になってきて、緑地保全活動をするに当たっても新たな知識が必要になったり、きっと新たな知見とかもあるかもしれないですし、正しい知識を知らないままに指導者として指導を続けるよりは、きちんと正しい情報を知って指導していただくほうが環境局として目指しているような保全に近づくだらうというところもあって、そういった正しい知識、新しい知識を身につけていただきたいというところがあります。

主にはそのようなことを考えておまして、保全地域に限らず、都立公園ですとか自然公

園、あとは区市町村が管理している緑地に関しても、恐らく同じような悩みだったり、目指すところがあるのかなというところで、保全地域のボランティアさんだけを対象にするのではなくて、都内で活動しているボランティア団体の役割を担っていただく人をターゲットにするような、保全地域だけではなくて、ほかの緑地の活動にも汎用性があるようなものを目指していたというところです。

以上です。

○松岡緑環境課長 補足をしますと、資料4を見ていただくと「受講者情報」というものが載ってございまして、1番から25番まであるのですけれども、いずれの方もこちらの「主な活動実績」を見ていただくと、何らかのボランティア活動を既に経験されている方でございます。ですので、こちらのボランティアの中から、さらに指導者クラスになることを目指している方に平成29年度は応募していただいたということになってございますので、そういった意味では当初の目的どおりいっているのかなと思っています。

また、この資料にはあらわれていないのですけれども、新たなボランティア団体の立ち上げという点におきましても、例えば八王子市の石川町の保全地域といったところでは、実際に指導者が核となって立ち上げた例というのもありますので、当初の予定していた目的はきちんと達成できているのかなというふうには思っております。

以上でございます。

○野村座長 今の説明とアンケート結果をごらんになって、何か気づくところとか、先ほどの分析の部分は、回答からどんな方が来ているのだろうというのが読み取れる部分があれば。

○小野委員 先ほど事務局のほうから、この制度が始まったときに保全地域でやる人がいないとあったのですけれども、現状はどのようなのですか。大体の保全地域ではもう立ち上がっているのですか。

○事務局 保全地域の制度上、指定したときは結構民有地が多くて、地権者さんから申し出があった段階で順次公有化していっているのですが、まだ全部民有地のところは立ち上げようがなかったりするのです。そういう前提があるのですけれども、今は50地域のうち立ち上がっているのは40弱になります。

○小野委員 8割ぐらいは、大体立ち上がってきているということですね。

○事務局 そうです。

あと、環境局に管理権限がないような、例えば玉川上水ですとか、環境局で土地を保有していなかったりという特殊な保全地域もあつたりするので、こうした保全地域以外で活動が

可能なところではかなり立ち上がっていて、公有化が進んできて、そろそろ立ち上がってもいいのではないかなと思うのがちらほらあるかなというところです。

○小野委員 わかりました。

あと、アンケートのとり方なのですけれども、うちの高尾の森自然学校でやっているのですが、ちょっとアメリカのやり方なのですよ。皆さん、旅行サイトでやったことがあるかもしれないですけれども、今は評価が大体0から10の11段階評価なのですよ。エクスペディアというのがあるではないですか、あれは行った後のアンケートで0から10になっているのです。0から10だと分析がかなり細かくできるのです。

うちの自然学校のほうでやっているのは、10をつけた人に記述式でなぜ10をつけたのか、理由を教えてください。それは何かというと、10をつけるぐらいだからとてもよかった理由をピックアップできるのです。0から9のところは10をつけられなかった理由を教えてください。ちょっとした不満ではないですけれども、改善点のところを記述で拾い出しているのですよ。5段階評価で出してもらうのはそうなのですが、もう少しヒアリング、ブラッシュアップができるようなことをやってみてもいいのではないのかなと思うのです。

○松岡緑環境課長 ありがとうございます。

○高川委員 来られている方の属性を知りたいのですけれども、大体ボランティア団体にいらっしゃる方なのですが、それはリーダー格の方なのか、次のリーダー格の方なのか、リーダーに言われて半ば嫌々行っている方なのか、どの辺なのですか。実際見ていらっしゃるかわからないと思うのです。

○小野委員 でも、ほとんどが受けている過去のアンケートから、経験者ですよ。

○高川委員 経験者なのですけれども。

○小野委員 レベルがどうかかわからないですね。

○高川委員 レベルというか、リーダー性、主体性というか、乗っかってやるのはいい、楽しみながらやるのはいい、でも、引っ張りたくはないという人は結構人口の半分ぐらいいると思うのです。

○事務局 資料4をごらんいただきたいのですけれども、受講する要件として、どこのボランティアで活動している人でないと受け入れられないといった制限を設けていません。ふだん我々が仕事上でかかわりある方たちというのが保全地域で活動されているボランティア団体さんになるのですが、そういったところであれば、この方は団体の中心的な人物だなといった情報は何となくおつき合いする中で見えてきたりはするのです。

例えば、公園ボランティアさんだったり、区のボランティアさんだったり、そういった方たちは日常的にかかわりが無いので、そういった方がボランティア団体の中でこういった立場をとられているのかというところまでは把握し切れていないのが現状です。

アンケートとして、参加された理由は何ですかというものはとっているのですが、知人からの口コミというところもございまして、そういったところで参加された方は会の中で既にとられている方がいらっやあって、そういった方たちから、次のリーダーのあなたはどうかみたいな話で受けられている方もいるかもしれないのですが、そこまで追い切れていません。

○高川委員 わかりました。

○事務局 今後、アンケートをとるなり、受講者の方たちとちゃんとお話しする中で、こういった立場の方々なのかというところを見ていきたいと思っております。

○高川委員 または、基本的にはアンケートを見て、こんなものなのではないかなと思うのですよ。総じて満足度が高いと思います。相当ハイレベルな、マニアックな講習だと思うので、来る人の属性によって満足度というのは相当変わると思うのです。こんなものでは生ぬるいという人から、自分はリーダー格になりようもないのに、こんなハイレベルなことは何を言っているかも全然わからないみたいなところまで、かなりいっぱいあるので、その属性分けをして、誰の満足度を高めたいかというところと、本当はそれも問題ではなくて、結局受講した後、都として望んだ成果が出ているかどうか、成果目標の評価のほうが大事だと思うので、余り細かいところでやるよりは、浅く広くこんなものでやるか、極力ターゲットを絞って、タイトルの見せ方というのですか、かつこよさも、受講料もかえって3倍にするという方策だってあると思うのですよ。そのあたりを後半で議論できればなと思います。

○小野委員 今、言われているのがそのとおりで、先ほどの青色の開き方を私は見ていて、一番満足度の低いのが1月20日に二庁ホールでやったミッションのものなのです。私はここが物すごく重要ではあると思うのですよ。

○高川委員 中身にもよるのですが、中身を見てみないとわかりません。

○小野委員 そうなのです。

○高川委員 私もそれを見て、そう思いました。

○小野委員 何かというと、実践型の方が運営のほうに頭がいていない、興味もないかもしれないし、聞いていて追いつけなかったかもしれないし、そこら辺がわかりませんよね。

○高川委員 そんなものを押しつけられてもみたいな。自分は能力を研さんして、体を動か

したいのだという人もいるかもしれない。

○小野委員 こういうカリキュラムのところで、私はここの運営というのは物すごく重要だと思っているのですよ。うちも財団で助成金を出しながら、NPOの方でもお金がなくて何もできないとよく言われる方があるわけで、運営の中でもお金だけではなく、マネジメントがしっかりできなくて、会が潰れていくというのを私は見ているのです。そういう意味でも、ここが重要ではあるのだけれども、その重要さがわかった上で受講しているか、耐え得るかというのは見ていかないといけないのかなと思うのです。

○高川委員 概していい評価だと思います。

○野村座長 全体的には、外でやる実習が人気というところですね。

○小野委員 これは、データベースはできていないのですよね。例えばデータベースがあれば、満足度の高いものが回ごとに年齢層でどれぐらいの偏りが出たかとチェックできるのですよ。わかりますか。

データベースがあれば抽出して行って、例えば最初の「専門講習ガイダンス」の満足度が高かったものは何歳ぐらいの構成なのかということと、「NPOの運営実態・ミッションの形成」というものが男女比率とか年齢層でどれぐらい偏りがあるかということで、多分ターゲットが絞り込めてくると思うのです。そういうものも少し調査ができるような形だと、次の戦略が組めるのかなと思うのです。

○篠原委員 指導者と一言で言ったときに、立ち上げる能力と活動で教えられる能力というのは全く違うし、私たちが活動している中だと、その役割というのは人によって全然分けているので、どの意味の指導者の講習なのかというものによっても、全然こちら側の出す内容が違って来るし、どういう指導者になりたいかという向こうの求めてくる、参加者が何を期待しているかというのも、指導者という言葉だけだとわからないなと思って、この定義も結構広いですね。

○小野委員 広いですね。

○篠原委員 どのレベルの人を求めているのか。作業を教えられるのか、立ち上げられる程度とか、統率できるレベルなのか、それとも運営をやる人なのかというのは、すごく求めるものが違うなと思って、そういう意味で言うと、実践にすごく満足度が高いところを見ると、まだまだ教えるレベルを求めてきている人が多いのではないかなという気はします。

○小野委員 現場指導者ですね。

○野村座長 イメージとしてはそんな感じなのですか。

私も何度かこのコマを受け持って、参加されている方と直接接した感じでは、知識を求めていたりとか、経験を求めていたりという方が多く感じますよね。

○篠原委員 既に参加している団体があると、自分がその運営側に回るという意識は余りないかもしれないですね。上に人がいっぱいいるしとってしまう。

○野村座長 新しい団体をつくりたい方というのは、こういう講座に出てきてなるのかな、どうなのだろうなというのは、ちょっと感じるころではあります。そういうことではなく、思いとかでやっていく方ということになると、講座を受けてやる気になるというよりはもともとやる気があるというか、そんな感じがするところもありますよね。

そうしたら、次のことに進めていってよろしいでしょうか。

ここからようやく議題のほうに入って、「次回の講習内容」というところなのですけれども、そちらのほうの資料の説明をまず事務局でお願いいたします。

○事務局 方向性の話に移る前に、既に触れてはいるのですけれども「受講者の推移と受講意向」ということについて説明させていただきます。

資料7をごらんください。基礎講習は定員50名で、専門講習は各コースの定員を25名として運営しております。

まず、基礎講習の受講人数についてなのですが、平成25年度まで20名前後というところで推移してまいりました。平成26年度に関しましては、この講座の中でサポートレンジャー基礎コースというものが開講した年度になりまして、このコースの受講に要する費用というものが安価であったため、受講生はそちらのコースに流れた影響で指導者育成基礎講習の受講人数が減少いたしました。その後、指導者育成講座は3年に一度の開催となりまして、サポートレンジャーコースは当講座と切り離されまして、別の講座として毎年開催しております。平成29年度の受講者数は25名と例年並みの人数まで回復しましたが、講習の定員の半数にとどまっているというのが現状になります。

専門講習については、講座が3年に一度の開催になったことに伴いまして、過年度に基礎講習を受講した方の参加が減少しております。

資料の下段をごらんください。基礎講習の受講者に専門講習の受講意向のアンケートをとっております。「予定が合えば受講したい」と回答された方が12名おられますが、うち半数が受講を断念した結果となりました。

これらの動向を踏まえまして、次回の講習の方向性について示した資料が資料8になります。基礎講習と専門講習はともに考え方は同じでして、受講者の受講負担の軽減という視点

での改善案となります。本日は時間に限りがございますので、主に基礎講習の内容について御意見いただければと思っております。

1点目として「受講年度の分散化」について提案させていただきます。平成29年度に關しましては、基礎講習と専門講習を同一年度に実施いたしました。そのため、基礎講習から続けて専門講習を受講するという方は休みなく、年間を通じて講習を受け続けていただくことになってしまいました。

そこで、次回の講習につきましては、基礎講習を来年度、専門講習を再来年度に実施できないかを検討していきたいと考えております。実施年度を分けることで、受講の頻度が低減されますし、余裕を持ってスケジュールを組むことができるので、夏季や冬季の実習に適さない時期を外して予定を組んでいくことが可能になります。

2点目としては「実践活動の導入・拡充」です。平成29年度の講座では、専門講習に限り実践活動を導入いたしましたが、基礎講習についても導入を検討しております。

資料の下のほうにございます導入例をごらんください。ここで資料2に載っております各科目のアンケート結果を参照していただきたいのですが、けれども、「ボランティア活動の理念」という科目と「安全な活動を考える」という科目につきましては、時間が長いとの回答が多く得られております。また、「自然環境行政」については、講師より半分程度の時間でよいとの意見が上がっております。そして、「自然公園管理の基礎」につきましては、今はその内容が当講座から切り離された別講座となって実施しておりますサポートレンジャー認定講座の内容と重複しております。こういった意見や状況を踏まえて、各科目の時間を削減していき、捻出された8時間を実践活動に充てられないかと考えております。

ここで、本日は欠席されている柳川先生の御意見を紹介させていただきます。

まず「自然公園管理の基礎」につきましてアンケート結果を見ますと、この科目の評判はいいため、完全に無くしてしまう必要はないのではないかという御意見をいただいております。現時点では、サポートレンジャー認定講座について当講座内で案内することにとどめさせていただき、対応することを検討しておりますが、当講座を継続して実施していくかどうか、廃止するかどうかについて御意見をいただきたく思っております。

また、実践活動の具体案として、受講成果を広報活動で広めていくことを御提示いただきました。当講座で学んだ内容や感想などを報告書としてまとめてもらいまして、報告書を環境局のホームページや各団体のホームページで公開することで、次回の講座を受講するか検討していただいている方々に対して、講座の魅力発信を行っていただくというものです。そ

の報告書の作成時間を講習時間の一部として置きかえることを想定しております。実践活動を導入するかどうかという問題もあるかと思しますので、導入の可否も含めて、基礎講習の構成案について御意見をいただければと思います。

以上が、次回の講習内容の方向性についての説明となります。

○野村座長 ありがとうございました。

そうすると、基礎講習、専門講習というものを単年度でやるのか、それとも、分けて組んでいくのかとか、その前にどんな概要で行っていくのがいいのかなというところも含めてですけれども、どなたか御意見がありましたら。

○小野委員 予算的な問題ですか。

○事務局 予算は影響しておりません。

○小野委員 何かというと、基礎講習を受けて、次の年に専門講習を受けるわけですよね。もし、その年に用事があるとかで受けられなかった場合に、さらに2年後を待たなければいけないですよね。そういうのはどうなのかなと今思ったのです。

○篠原委員 今は3年に1回なのですよね。

○小野委員 そういことです。1回チャンスを逃してしまうと。

○高川委員 そこが変わらない限り変えられないですね。

○小野委員 でも、確かに併用してやっていると、選ばなければいけないのはわかるのです。

○高川委員 もう一回論点を整理してもらっていいですか。今ここで議論したいことは、1年、2年と分けてやるのかどうか。講座の内容もですか。

○松岡緑環境課長 まずは、その講座の内容の前に、講座自体が基礎と専門があるのですけれども、今は同じ年度で一緒にやっているわけです。

○高川委員 きょうは内容とかトータル時間も議論するのですか。

○松岡緑環境課長 そうです。

○高川委員 広報の仕方ということですか。

○松岡緑環境課長 そうです。

○事務局 広報の仕方については、また後で説明させていただきますので、そこで御意見をいただければと思います。

○高川委員 資料8に沿ってということでもいいのですね。

○松岡緑環境課長 そうです。今議論していただきたいのはそこでございます。

○野村座長 どうぞ。

- 高川委員 「自然公園管理の基礎」というのを削っていいかということですか。
- 松岡緑環境課長 そうです。
- 高川委員 わかりました。
- 野村座長 それは内容的なことですね。そこまでということは、まず基礎講習というのをやって、基礎講習というものと専門講習という枠組みという2段階の構成で講座を構成していくというのは変わらないところなのですか。
- 松岡緑環境課長 そこは、今のところ変える予定はないです。
- 野村座長 変えるつもりはないというところですね。
- 高川委員 聞きそびれたのですけれども、これを実施しているのは土日なのですか。
- 事務局 平成29年度に関しましては、土日に実施しております。
- 高川委員 全てですか。
- 事務局 はい。働かれている方が来られるという想定で、講座自体で5時間、6時間とかかかってしまうものもございますので、そういった意味で土日に設定させていただいております。
- 野村座長 これは1日ばかりでしたか。そうでもないですか。
- 高川委員 大体10時から15時、16時ぐらいです。
- 事務局 大体が1日かかりになっております。
- 野村座長 ほぼ1日ですね。
- 篠原委員 8割参加すればいいというものの、皆さん、どのぐらい参加していたのですか。大体8割なのか、10割参加した人がほとんどなのか。
- 事務局 ほぼ参加されている方が多いです。ただ、平成29年度に関しましては、8割受講というところに満たなかった方が2名いらっしゃいまして、受けていてやはり大変だなというので、早々に来なくなってしまう方も中にはいらっしゃいます。大体の方は毎回来ていたという形になっていました。
- 篠原委員 1回休んだら、もうぎりぎりですよ。
- 野村座長 基礎講習というもので、扱う内容的には1年を通さなくても今までやっていたので別にいいのかなという感じはするのですけれども、逆に1年かけたほうがいいのかということも何かあったりしますか。
- 平成29年度は、7月、8月ぐらいまでの何カ月かでぎゅっとやってしまったのですよね。
- 事務局 基礎は9月までの4カ月間です。

○松岡緑環境課長 どちらかという、基礎と専門を両方やるとさすがに負担というか、1年間にやる回数が多過ぎるので、2年度に分けたほうが無理なくできるかなという考えで、しかも、夏場にやるとなかなか大変かなと思うので、春と秋みたいな季節のいい時期に分けられたらいいかなと。講座全体のスケジュールに余裕を持たせたほうが受けていただける方も、講師の方もやりやすいかなという判断でございます。

○篠原委員 専門講習が冬に偏ってしまって、やりづらいということもありますか。それは余り関係ないか。

○松岡緑環境課長 全般的にぎゅっとなっているので。

○篠原委員 毎週あるとつらい。自分のところができなくなる。

○事務局 平成29年度の専門に関しては、天候の問題で来られなかった方がいらっしやったりしまして、一応予備日は設けてあるのですが、そういった影響をできるだけ避けるようなスケジュールの立て方ができればいいとは思っております。

○高川委員 結局、ターゲットによるのですよね。やらないほうがいいと思いますけれども、仕事をされていない方だったら連続1週間でやってしまうというパターンもできなくはないですし、座学をうまく組み合わせれば、日数自体を圧縮することだって設計上できないことはないかもしれないです。でも、多分土日で第何何曜日と決まっていたほうがスケジュールリングはしやすいし、必須でなければいいのですけれども、毎週だと受ける人は減ってしまうかなと思うのです。

○野村座長 6月が2回、7月が3回、8月が2回、9月という感じですからね。これは3カ月の間にこれだけ入っているわけですからね。

○高川委員 ちなみに言うと、3年に1回にした理由というのは何なのでしたか。

○事務局 それは予算上の理由で、参加者の実績をふまえて、予算部署のほうからの指示で毎年実施していたものを3年に一度としております。

○高川委員 仮にこれが毎年1,000人募集していたら、また毎年に戻る可能性はあるということですね。

○事務局 申し込みがあれば。ただ、定員は50名というところでやっているのです。

○高川委員 まずは、3年に1回というものをベースにして考えると、1年目、2年目という以外に選択肢はないのではないですか。妥当だと思います。

○篠原委員 受けるほうとしては、こんなに凝縮されているとちょっとつらい。

○高川委員 ステップアップ感もあるので、最も大事なものは3年に1回しかないのですよと

いうのと、ステップアップしたい人は2年がかりですよというのを、広報段階で必ず都民が目に見える状況に持っていくというところだと思うので、1,000人になったら考えましようと言ったのですね。

これについてはもういいのではないですか。どんどん次の議題に行ったほうがいい気がします。

○野村座長 そうしたら、これは2年に分けてやっていくほうがよさそうだということですね。

次は内容のところ、どれをどういうふうにしたいか、もう一回言ってもらっていいですか。時間配分。

○事務局 まず、実践活動を導入するかというところですか。

○野村座長 実践活動を導入するかどうかですね。

○事務局 はい。

前回の委員会でも、実践活動を今後拡充していくという提案で進めさせていただいておりました、その引き続きということで、平成29年度時点の専門講習で実践活動を導入していて、基礎はまだということで、基礎にもそれを導入していくのかどうかというところで御意見をいただきたいのと、もし導入するとなりましたら、今やっている講習の時間の配分を変えなければいけないので、どういった配分でというところで、導入例はあくまでも例示ですので、ほかにここの講座をこうしたほうがいいのかという御意見があれば、そういったところで御意見をいただければと思っております。

○野村座長 今までの時間数が36時間か。

○事務局 はい。

○野村座長 これは、座学が13時間と実習が23時間。

○篠原委員 どんな実践を入れたいですか。何か想定はありますか。

○野村座長 それは、自分で選んでということなのですよ。

○篠原委員 専門と同じようなお題があつてということですよ。

○事務局 テーマ自体はこちらからお示してということになりますので、実践活動を導入するとしたら、基礎を受講される方たちに適したテーマというところもあわせて検討していく必要があります。

○高川委員 この実践活動の目的というか効果だと思うのですけれども、多分大きく2つあると思うのです。ひとつは、プランニングして実行するという一連の能力開発をするという

ところ、もうひとつは、受け身ではなくて、いろいろ吸収したものを自分なりにそしゃくして、表現して、これをやってみるまではないのですけれども、発表というアウトプットまでやって学習効果を高めるといふところだと思ふのですよ。結局どちらをとるかだと思ふのです。アクティブラーニングというのですか、座って聞くだけではなくて、吸収したものを出すという学習の場、やり方として導入したいのかどうかという点だったら、個人的には導入したほうがいいと思ふます。そうではなくて、プランニングして何とかみたいな力を磨きたいのだったら、それは誰がターゲットで、基礎講習でどの人をどこまで引き上げてという目的によつてと思ふます。

大きい話をするので、私、この実習はこのままだもいいのではないかなと思つて居るのです。とてもすばらしいと思ふます。課題なのは、何が課題なのかがちょっとわからないといふところですよ。

先ほど小野さんがおっしゃつたアンケートの結果から、実は総じて満足度が高いのだけれども、この層にはすごい不満だとか、一番響いてほしいスペシャリストの方たちには意外にも物足りないのだといふのがわかれば、そこに合わせてシフトしていくといふこともできると思ふのですが、今の感じだとそれなりにとがった企画なのですよけれども、なるべく幅広く受けられるよといふ設定ですよ、アンケートもとても悪いといふほどでもないと思ふので、総じていいのではないかなと思ふます。

むしろ時間数を減らすとか、実習を入れたほうがいいのではないかと思つて居る理由といふか、根拠のほうは気になりますね。委員からの指摘なのか、受講者からのリクエストなのかでも変わってきますし、受講者からの指摘でも、それは狙つて居る層の方からの意見なのか、そうでないかによつても違ふますので、その辺のデータがないと、いい面と悪い面とが絶対発生すると思ふます。なので、そのあたりのイメージがもしあつたら聞かせてほしいですよ、これを議論してもどこに絞りますか。多分し尽くせない。

○野村座長 そうなのですよ。

○高川委員 ただ、ぼやつとではなくて、なるべくこういう層を狙いたいといふので、そこで評価してうまくいつて居ますね、全体の満足は狙えないけれども、全体の8割は行つて居ますねといふところを目標にするとかではないですか。

○松岡緑環境課長 そういつた意味では、満足度の分析が前回のアンケートをもとに出して居るので、確かにわかりづらいつ部分があるのです。

○高川委員 難しいと思ふますよ。

○松岡緑環境課長 今回、改めて追加で調査して、そこら辺ももう少しわかれば、それを含めてお示しできればと思います。

我々が目指しているところは、両面というか、指導者にもスキルを磨いていただきたいし、組織の立ち上げのなところもできればいいでしょうし、先ほど申しましたように当初の目的から言いますと、いろいろなものを期待しているところもあったりして、どこという明確な絞りは今のところないのです。ただ、そこが受講者側の思いと大分違ってくると、それはそれでよろしくないかと思うので、そういった意味ではアンケートをもう一回とろうかなというところは考えているところなのでございます。

○高川委員 結構アンケートの設計も分析も難しいと思うので、それをやっていただいてもいいのですけれども、人数が少ないですし、はっきり言って集計する意味もないと思うのです。20人いたら、もう20人の回答が全部並んでいたほうが情報量としては多いので、ディスカッションできることもふえると思いますよ。なので、こういう女性が来たときにどういうリアクションだったとか、一人一人から仮説検証をしていったほうがはるかに早いと思います。

ばりばりのリーダー格でやってきた方にとってはどうだったかというのと、そういう方に勧められて、右も左も余りよくわからないのだけれども、いいから行ってみろと言われた60歳ジャストの女性の方はどうだったとか、サンプル数も少ないので、そういう感じのほうがいいし、むしろ現場感覚を大事にされた評価のほうがいいのではないかなという気がしますね。でも、何となく時間を減らしたほうがいいのではないかという実感を持つということですよね。そこをちょっと知りたいのです。

○事務局 一つ課題だと思っているのは、定員50名のところに対して受講人数が半分しか来ていなくて、毎年24とか32を受けていたところ、3年に1回になっても25しか来ていないところが課題かなと。

○高川委員 そうであれば、今の方法だと改善はしないです。なぜかというと、来ていない方の意見こそが大事だから、来ている方の意見を聞いてもわからないと思います。なぜ来ていないかということ、一つは情報が届いていないから。ここはすごく大事です。そもそも誰に情報を届けたいかということですよ。

例えば潜在的には、ふだん会社員をしています40歳の方、何か社会貢献をしたいなと思っている、といった人にまず情報が届いていますかという話がありますよね。その方に来てほしいかどうか。それで目指しているような保全緑地に入って、団体を立ち上げるという方に

したいかどうか。今ではなくてもいいし、20年後でもいいのですという設計なのかどうかだ
と思うのです。

もう一個データとして知りたいのは、参加者の人数ではなくて、平均年齢の推移です。こ
れは年々上がっているのですか。ずっと60歳か。

○事務局 おおむね例年とおりで。

○高川委員 ぴったりか。

○事務局 多少の変動はあると思うのです。

○高川委員 ほとんど変わらないか。

○野村座長 もっと高かったときがあります。

○高川委員 そうなのですか。

○小野委員 そうなのですか。

○野村座長 最低60歳ぐらいのときがありましたよね。平均70歳とか、80代もちらほらみた
いなときがありました。

○高川委員 結構やられている方々という感じなのですか。

○野村座長 はい。

○篠原委員 60代でも初心者が多かったですね。

○篠原委員 保全地域に来る方だと、60代から始める人とかのほうが多いので、60代で初心
者という印象の方が多い。

○高川委員 多かったのか、多いのか。

○篠原委員 私たちがやっている活動に参加する方で、始めるのが60からなのですよ。そ
ういう方が結構多い。

○小野委員 リタイアしてからか。

○篠原委員 リタイアしてから始めようという方は多いと思います。

○高川委員 50代の方は、きっとそれを見越して来られていたのですよね。

○篠原委員 逆に40代、50代もいますけれども、違う動機で、別に退職後とかを考えている
のではなくて、地域で何かしたいという違う思惑の人たちが多く、そういう人たちがこ
こに来るかなというのはわからない。

○高川委員 大事なのは人数ではなくて、受講した後なのですよ。これはたった10人でも、
毎年10人が団体を立ち上げてくれたらきっと大成功なのです。下手な話をすると、そうでは
ない人は切り捨てるという選択肢もゼロではないのですよ。やらないほうがいいと思います。

極端な話です。

○事務局 コアな人に届けばいいということでしょうか。

○高川委員 多分人間はそうではないので、やってみて一步一步意識と技術、経験が上がっていったら、50ぐらいのときはよくわからなかったけれども、60代でめきめきになって、70代が皆に慕われるようなリーダー的存在みたいな、人材育成というのは20年スパンとか、もっとかかる話だと思うのです。

○篠原委員 広報の話になっていますけれども。

○小野委員 事務局のほうで50という定員を設けるのだったら50以上の申し込みをもらいたいですね。それは企業だったら間違いなくマストですよ。そうすると、それ以上に申し込みをしてもらえるのが、先ほど言われた広報もそうですし、私はどちらかというと内容の魅力だと思うのです。うちがセブン-イレブンでやっているからではないですけれども、うちの商品というのは結構高いのですよ。だけれども、売れるというのが商品力というか、内容の味とかに自信を持ってやっているというところもあるのです。

何かというと、私たちもいろいろなイベントがあるときに、結構高いイベントとかがあるではないですか。でも、中身がいいから行く。これは余談になるかもしれないですけれども、私もびっくりしたのが、うちの部下が音楽イベントに行くと言ったのですよね。参加費が幾らかわかりますか。2万ではないですよ。3万5000円。

○高川委員 そうなのですか。

○小野委員 そうなのです。でも、あれはほとんど売り切れているのですよ。何かというと、やはり演奏者とかの魅力だと思うのですよね。魅力のあるものにはお金を出したり、時間を割くというのが絶対的に私はあると思うので、確かに広報で行き渡らなかったら魅力があっても伝わらないわけですからだめですけれども、広報を徹底した上で、プログラムの中身というのもしっかり組んでいかないと。先ほどのターゲットに合ったような形の構成にしていこうというのは絶対必要ではないのかなと思います。

話はもう一回戻ってしまうのですが、講習の方向性の部分のところですが、先ほどの専門の部分のところでは運営というのがあったではないですか。あれを少し切り離すというのはできないですか。私も話を聞いている中では、現場での対応をできるような情報とか技術というものを欲しているというのが多分メインではないのかなと思ったのです。NPOではないですが、組織を運営する上でマネジメントはめちゃくちゃ大切ですよね。

○野村座長 はい。

○小野委員 そうだと思うので、あそこの部分だけを切り離すというのも一つの考え方、選択肢として考えるのもありなのかなというのは思いましたね。

○高川委員 都として受けてほしいのですよね。私だったら切り離さず、どんなに評価が低かろうが必須でやってしまいます。

○小野委員 もう押し込んでしまって、それもそうですよね。

○篠原委員 選択科目にするとか。

○高川委員 専門性の方向性としては、3通りぐらいありますとか、技術指導者、マネジャーという3方向の人が一遍に受けるのですよという見せ方でもいいですし、専門のほうは基礎を受けていると思うので、私は、余計な見せ方の工夫とかブランディングは必要ないかなと思うのです。

○野村座長 そういう意味では、すごく受けがいいような内容と、そこにこちらが伝えたい内容というのを入れ込んでいってしまうということもありかなと思うのです。それだけが切り離されてしまうと、これは興味ないのだけれども、出なければならぬから行くかみたいな感じになるかもしれないのですが、その中に入ってしまったら、そういえばこういうことに気づかなかつたなということに気づくことにもなるかなと思うのですよね。興味がないと、多分入っていかないかなと思うのです。そうすると、これは内容が難しいですね。

○小野委員 資料8の一番下の「自然公園管理の基礎」の5時間をゼロにするかというのは話をしたほうがいいのですよね。

○松岡緑環境課長 そうです。きょう御欠席の柳川先生からも御意見をいただいて。

○小野委員 残したほうがいいのではないかという話なのですよね。

○松岡緑環境課長 そうです。

○小野委員 これは、どういうものをやっているのですか。職員の方がやられるのですか。

○事務局 これは職員と、レンジャーという自然公園の管理を行ってくださっている方が講師を務められているのです。

○小野委員 それはNPOの方か。

○事務局 東京都の非常勤職員です。

○小野委員 どういうことをやっているのですか。ゼロにするというのは、逆にやらなくてもいいという意味合いで事務局側からの提案ではないのかなと思うのです。

○松岡緑環境課長 これが、ほかのサポートレンジャー認定講座というのが。

○小野委員 重複しているのか。

- 松岡緑環境課長　そうです。やらなくていいというよりは、そちらとかぶっているので、この部分はうちの講座からは外してもいいのかなというぐらいのもの。もちろん内容的には、この人たちにとって必要だと思うのです。
- 野村座長　これをここで8時間削減して、6時間を実践活動、2時間を発表。
- 高川委員　実践活動というカリキュラムに変えてはどうかという提案なのですよね。
- 松岡緑環境課長　そうです。
- 小野委員　でも「ボランティア活動の理念」は4から3で1時間削減、「安全な活動を考える」も4から3で1時間削減、これも受講者の意見を聞いた上でということですよ。
- 松岡緑環境課長　そうです。
- 高川委員　そうなのですか。
- 小野委員　「理由」と書いてありますよ。
- 高川委員　アンケート結果というものがですか。
- 事務局　アンケート結果なので、平成29年度の受講者はこの2つの科目が長いと感じられている方が比較的多目だったというところから、1時間ずつ削減させていただいたのですが、長いと感じているのは受講者の意見なので、長いと感じられたとしても、講師の方が4時間かけて内容をちゃんと伝えなければならないという判断になっていくのだったら削ることも難しいとなるかもしれません。
- 高川委員　これは座学ですか。
- 事務局　「ボランティア活動の理念」は座学ですね。
- 高川委員　長いですね、絶対長いです。
- 小野委員　私も4は長いと思います。
- 事務局　両方とも講義、座学の科目になっています。
- 野村座長　それを1回の講座にまとめてしまっているのが、非常に長い感じもあるのではないのかなと思うのですよね。
- 高川委員　これは、ワークとかを入れて4時間なのですか。それとも聞きっぱなしなのですか。
- 小野委員　これはやり方次第なのですよね。ただ一方的に先生みたいに話して、4時間聞いていたら疲れるし、どうやってボランティアをまとめて理念を一緒にするというワークショップを入れると結構短く感じたりとか。
- 高川委員　実践活動と言っているプログラムみたいにやって4時間だったら、別に長くは

ないと思いますけれども、自分で現状分析をして、課題を見つけてもらって、どう改善した
いかと宣言してもらって、アクションプランをつくって、その間に講義で1時間だけ話して
とか。座学で4時間は長いと思いますよ。1時間でいいと思います。

○小野委員 理念の共有だけのような感じがするのです。

○高川委員 1時間でいいと思います。なので、長いと言われていた理由をちょっと見ない
と、単純に時間を減らすと、担当している先生からは減らすなどと言われると思う。

こういう制度である以上、サポレンの自然公園管理、制度に関する説明が私は必須だと思
います。サポレンさんと合同研修会みたいなものだったらありだと思えますけれども、この
講義としても入れたほうがいいと思います。

○篠原委員 実習で巡回を体験するのか。

○事務局 そうです。最初に制度の説明がありまして、実際にレンジャーが管理を行って
いるような場所を一緒に見て回るという内容になっています。

○篠原委員 講義の一連のテキストが見たいですね。こんな時間をかけて話す中身が知り
たい。基本的に講義と書いてあるのは、ワークとかはないのですか。

○事務局 現場に出て作業がないようなものに関しては講義となっております、講義の中
でワークが含まれているようなものも中にはあります。

○野村座長 そうすると、この委員会で何が何時間ということ意見をいうよりは、例
えばこういうことだったら、こういうやり方をやったほうがいいのではないかということ
を決めるのだったらいいかもしれないのですけれども、これは何時間、これは何時間とこ
こで言ってもしょうがないのかなという感じがちょっとありますよね。

○事務局 例えば、こういう要素が足りないのではないですかということですか。

○高川委員 結局、それも誰に来ていただいて、何に入って、どう出ていくかというところ
だと思うのです。なので、この議論を深めるよりはそういう表をつくる。

例えば40代で、自然が好きだけれども本職は関係ない人が入って、こういう素養、技術、
経験を身につけていただいて、アウトプットとして期待することはここですと。潜在的に20
年後に中核になり得る人を育てたいとか、がんがんばりばりの67歳の方はここを伸ばしても
らってさらにとか、リタイアした62歳の方はこうですという全体を貪欲に包含したいとい
うことなのだと思いますけれども、その辺が整理されて、このこまは絶対全員が必須、このこまは選択
でもいいとやると、こんな人はこんな活躍ができるのですよという見せ方もできるようにな
りますし、もっと言うと、それに応じて広報の見せ方とかを変えられると思うので、そうい

うものを整理してだけで、私は今の素材としてはもういいのではないかなと。

足りないものを言えば切りがないですけれども、これを民間でやったら100万円ぐらい。

○小野委員 細かいところまでやるとしますよね。私もそう思います。

○高川委員 下手すると、100万円でも受ける人は出てくるかもしれないですね。100万を払ったら楽しかったで絶対終わらないではないですか。100万かけたから意地でも団体を立ち上げて活躍してやるとなるでしょう。お金というのは不思議なのですから、コスト感と意欲のドライバーにどれぐらいなるかというところもあるので、どこまで絞るかは難しいのですが、そういう整理をしていただけると私らも議論はしやすいかなと思います。

○野村座長 既に広報のことにも大分触れてきているところなので、今までどうだったかということをお説明いただいたほうがいいかなと思います。

○事務局 それでは、平成29年度の基礎講習実施に当たりまして、実際に行った広報活動の結果について報告いたします。資料9をごらんください。

従来行っている『広報東京都』というものへの掲載ですとか、区市町村の広報への掲載のほか、平成29年度に開設した「里山へGO!」というホームページを活用いたしまして、ホームページへの掲載ですとか、メールマガジンの配信というものを行いました。

アンケート結果によりますと、受講生が基礎講座を知った理由として最も多いのが「広報東京都」、その次が「知人・所属団体からの紹介」ということでした。

逆に効果の低目だった広報は、自然活動に興味のありそうな方が集いそうな施設への募集チラシの配布などです。それらの施設に500部ほど配布していたのですが、それを見てくださいる方は少なかったようです。

効果の高かった広報は今後も継続していきます。特に保全活動団体への周知というものは早目に行っていきたいと思っておりますが、効果の低目だったチラシにつきましては、配布先や配布部数を精査していきたいと考えております。

また、今後さらに注力していきたいのが「里山へのGO!」を活用した広報活動になります。昨年度末までの登録者数になりますけれども、今、1,724名となっております。保全地域体験プログラムへの参加者数は2,420名となっております。参加者の中には、繰り返し活動に参加してくださるリピーターと呼ばれる方々が一定数いらっしゃいまして、そのリピーターに対して何かアプローチができないかということをお今後検討していく予定です。

今までお話にも挙がっているのですが、基礎講習の受講者の平均年齢が61歳と高目の年齢構成になっておりますので、ボランティア団体を活性化して、安定に活動を続けてい

ただくためには、もう少し下の世代への参加も促していきたいと考えているところです。お示した広報手段のほか、効果的な方法等がございましたら、ぜひ御意見をいただきたく思います。

説明は以上になります。

○野村座長 どうでしょうか。

○篠原委員 配ったのはどんなチラシだったのですか。見た記憶が余りないなと思ったのです。

○事務局 チラシというか。職員がつくっているものになります。

○高川委員 ぜひ外注しましょう。

○篠原委員 これは施設に置いて、多分見てもらえない。

○小野委員 どこまで内部でつくられるのかわからないですけれども、写真がないと目は引きつけられないですね。ボランティア活動をやっている写真を入れたりとか。

○篠原委員 多分、私のところにもメールの案内は来ていたと思うのですけれども、メールで来た案内を参加している人みんなにメールで飛ばすことがなかなかできないので、チラシであったほうが活動の場でお知らせするにはお知らせしやすいのですが、それだと多分もらってくれないので、もっと魅力的にしたいなという。

○小野委員 デザイン性ですか。

○篠原委員 そうです。あと、ネーミングもあるかもしれないです。

○小野委員 ちょっと厳しい御指摘ですね。

○篠原委員 広報の分で言うと、そんな気がします。

○小野委員 そういうところは、人がとってくれるようなもののほうが。

○篠原委員 メールで業務的なお知らせと一緒に来る感じだったと思うので、指導者と書いてあったから、これは普通に参加している人はいいかという感じで、コアなメンバーにしか流していなかったと思うのですよ。そんなイメージがついてしまっている。もったいない。

○高川委員 改善の余地がめちゃめちゃある。

○小野委員 やりがいがあります。

○高川委員 カリキュラムよりは、まずこの辺からでしょうね。目にとまる位置にあるかどうか、目にとまってとってもらえるかどうか。それは電子媒体でも一緒です。次に行動変容に移るかどうか。例えば申し込むとか、悩むとか、家族に相談するとか、知人に聞くとかでもいいですけれども、大体その3段階があると言われているので、東京都の広報誌だと目の

届く範囲にはあるのですが、この段階で見ているのは60代ですよ。2行とかなのでタイトル勝負ですよ。ウェブサイトを見て初めてデザインの話になると思うので、それぞれで議論していきますか。それか、個別に聞いてもらったほうが早いかもしれないですね。

○篠原委員 「里山へGO！」に来る層が指導者と言ってぴんとくるのかなと思った。

○野村座長 「里山へGO！」に参加している人もかなり幅広くて、本当に体験したいという感じの初心者の方も親子とかでいらっしゃるのですけれども、リピーターの方で本当に指導者になってもいいのではないかという素養、素質があるのではないかという人も中にはいらっしゃるので、そういう人が後押しされて変わるということもあるかなとは思っています。

○篠原委員 逆に不思議なのですけれども、ずっとリピーターで参加して、毎回来る方もいらっしゃるのですが、何でどこか1カ所に決めないのかなと思ったりしますね。

○小野委員 そういう方はいますよ。

○野村座長 そういう参加の多様性なのではないですか。今までのボランティア団体でこの場所でというやり方以外のやり方。

○篠原委員 そういう方が指導者になるかといったら、思っていることが違うような気がしてしまふ。

○野村座長 思っていることが違うかもしれないのですけれども。

○小野委員 私は、ターゲットに届くかどうかはわかりませんが、どこでひっかかるかがわかりませんから、広く情報を発信するべきではないのかなと思うのです。

ちょっと見ていた中で、私は民間の情報発信できるものも活用したほうがいいのではないのかなと思うのですよ。GEOCさんの「環境らしんばん」というのを御存じですか。出しているのですか。

○事務局 出していないと思います。

○小野委員 「環境らしんばん」もそうですし、うちも高尾の森自然学校で講師を受け持ったのですが、そのところのそれぞれの受け持っている講座を持つところにも情報発信をお願いするとかがあってもいいのかなと思うのですけれども、新規開拓のときにどれが一番いいのかなというのは、潜在的なところで、私は見えないですね。

あと、市区町村の広報誌というものがあるのですけれども、市区町村でよくある中間支援のサポートセンターとか、先ほどのチラシに目がとまるのだったら、そういうチラシをつくれるのだったら、ああいうところに、ボランティアをやりたいのだから、何をしようかなみたいな人に目がとまるような形で置くということもあってもいいのではないですか。各市区

町村のものはつながっていますよね。そこから配るという形も一つの方法だと思います。

○野村座長 ボランティアセンターとか市民活動センターとか、社会福祉協議会などでやっている場合が多いかと思うのですけれども、そういうところのほうが市の広報などよりはターゲットに近いところが見ているのではないかなという気がします。

○小野委員 『広報東京都』が多いのはパイが多過ぎなので、結果としてはそういう結果を生む。

○高川委員 少し多いですね。

○野村座長 何分の10なのかという感じですね。

○高川委員 効果から言うと低いと思います。

○小野委員 2番目に出ている「知人・所属団体からの紹介」というのが本来は1番なのですよ。何かというと口コミ。だからもしあれだったら、過去の参加者からそういう御紹介をいただくとか、新しくこういう講座が始まりますので、お知り合いの方にDMで2枚か3枚チラシを送るというのも一つの方法かもしれないですね。

○高川委員 それはやっていないのですか。各緑地で配ってもらうとかはやっていないのですか。

○事務局 団体さんとお会いする機会があったタイミングで、会の中でどなたかを御推薦いただけませんかというお声かけはさせていただいています。

○高川委員 200枚ずつ渡したほうがいい。

○小野委員 ちょっと笑いながらでいいですから、「1人はノルマですよ」みたいな。

○高川委員 あとは、ネーミングの魅力ですね。

○篠原委員 多分「里山へGO!」に参加している人に渡すのであれば、ハードルは高いけれども、ここでステップアップして自分で立ち上げてみませんかというターゲットに合わせたメッセージがあるといいなと思うのです。

○高川委員 受ける人というのは、多分2,000人に1人ぐらいしかいないので、それでいいと思うのですよね。そんなに万人受けを狙わなくていいのですけれども、看板に偽りなしというか、皆さんが本気で狙っていることをちゃんとタイトルとか各講座の名前に込めたほうがいいと思うのですよね。「自然環境行政」というこまの名前だと何をやるかわからないですけれども、日本における最先端の自治体行政を学ぶとか、東京ではそうだと思うので、本当にどこが魅力か。

民間だと、40代に受ける言葉を使うか、60代に受ける言葉を使うかで、これだけは決めな

いといけないので、どちらかにやらないといけないのですけれども、そこまで極端ではないにしても、もうちょっと一個一個のこまの魅力、いいか悪いかはわかりませんが、ハイレベルさを見せるのかどうかとか、その辺は工夫のしようがあると思う。

○小野委員 多分、広報は幾らでもできますよね。まだ改善の余地がいっぱいある。

○篠原委員 こうなってほしいという言い方ではなくて、これを受けたらこうなりますよみたいなものが欲しい。

○高川委員 劇的ビフォーアフターが見せられていいですよ。

○篠原委員 何をやりたい人とか、こうなりたい人という広報の仕方、メッセージの伝え方。

○野村座長 そうであるなら、最初のほうで説明をされた、こんな例もありますよ、受講生がこういうふうになりましたというのもいいのかな。

○高川委員 いいですね。ちょっと顔写真を載せたりとかね。

○野村座長 そういう人に登場してもらって、インタビューみたいなコメントをいただくとか。

○高川委員 わかりやすいですよ。

○小野委員 それはいいと思いますね。

○野村座長 そういうところを本当に狙っているわけですから、こうなりたいと思う人が来てくれる。

○小野委員 過去の受講生とのつながりというのは、先ほどの口コミも含めて、物すごく重要だなと私は思っているのです。

ちょっとおもしろい例で言うと、先ほども言った私のやっている海外研修というのは年間6人しか行けないのですけれども、ずっと十何年やって110人ぐらい行っているのです。そのグルーピングをしているのですよ。私が高尾で受け持ったときに15人ぐらいが来たのですけれども、毎回連続講座で受けているから仲がいいのですよ。

話は余談でずれますけれども、グルーピングもすると、あれからどうしているのかという情報交換ができるようなものもあると、今度そちらへ手伝いに行くよというのもできるし、例えば私がやっているのは海外研修生のOB会をつくったのですよ。OB会をつくって1年に1回交流会をやって、その交流会の中で情報交換をしたり、異種連携をしたりというのをやっているのです、ここの事業ではないけれども、この延長線上のところも少し考えておくとおもしろいかもしれません。

わからないのですけれども、過去の受講生で年に1回は交流会をやって、そこにNPOの人も加

わってとなると、うちに来てくださいよとか、その技術だったらうちのほうから提供できま
すよというの、つながりができるのではないかなと思います。そこからロコミでさらに次
の講座生をふやすというのも一つの方法だと思います。

○高川委員 ロコミが一番きくと思います。

○小野委員 そうなのですね、ロコミなのです。

○高川委員 400人集まっていたら、お願いしますと言えば、ただそれだけで倍はふえる
と。

あとは、こういうものをやる方というのは、必ずほかの分野でもボランティア活動をして
いる方なので、先ほども言ったとおりボランティアをしている人が目にする場所、市民活動
支援センターとか社協さんに置くと効果が高いですね。

○高川委員 あと、60代に絞った広報ばかり話していたと思うので、30代とか40代に向ける
のだったら、紙ではないので、ウェブマーケティングの部分もちゃんとやったほうがいいと
思います。

○篠原委員 「里山へGO！」のメルマガは効果がなかったというのがもったいないですね。

○高川委員 それは、チラシの内容を変えれば。まずは凝ったことはせずにカラーにするだ
けでも3人ぐらいふえてきそう。

○篠原委員 全然違うと思う。

○事務局 お配りしたときは、カラー印刷でやってはいます。ただ、写真とかが足りないの
でその辺。

○高川委員 デザイナーさんをうまく使えば、5万とか10万ぐらいで劇的に変わるのです。

○篠原委員 「里山へGO！」が伸びているのは、サイトのビジュアルがすごくあると思うの
ですね。そこからこの案内に移った途端にああなってしまうともったいないかなという気
はします。絶対見ている人はいると思うので、母数が大きいところはちゃんと広報を強化し
たほうがいいと思います。

○野村座長 やりようがいっぱいあるということで、それぞれいろいろな御見識に基づいた
御意見を出していただいたところですので、そろそろということなのです。

全体を通して、最後に委員の先生方でこれだけはというお話があればお伺いします。

○高川委員 私からぜひ言いたいことがあるのですが、この制度自体を私はとてもいいと思
っているのですけれども、長い目で考えると変え始めたほうがいいと思っています。今、ボ
ランティア団体さんがすごく力を持っているのですけれども、多分この場限りというか、こ

れからボランティアの方というのは減っていくと思うのです。実はこういう方というのは30代から何かをやっている方々で、全国自然保護の担い手というのはまだ1世代目で、ほとんど世代交代ができていないのです。

今の若い人というと、時間がない、社会課題に関心がない。環境への関心というのはどんどん下がってきているし、若い親子世代で自然体験も減ってきているので、60代に頼って各地の自然保護をするという仕組み自体があと10年ぐらいである程度限界を迎えると思うのです。ただ、ゼロにはならないですよ。

なので、頂点の講座だと思うのですけれども、それだけではなくて、「里山へGO！」みたいなところからここまでの間を埋めるステップアップのところになると、本当に60代、70代のスーパーマンみたいな方が今後生まれてこない可能性もあるので、そこは少し見据えておいたほうがいいかなと思うし、そういうのを考えると、本当に1回、2回でもいいので、40歳の方がこういうものに入れる接点をつくるとかも、多少は今からでもやっておいたほうがいいですし、来られなくてもとりあえず知ってもらうだけ、Facebookの広報に登録するとか。20年後まで効果がないと思いますよ。結構その辺は気をつけておいたほうがいいかなと思います。

○野村座長 ありがとうございます。ほかに。

○篠原委員 内容について中途半端に終わってしまったのですけれども、まだこのお話をする機会はありますか。

○松岡緑環境課長 もちろんあります。

○篠原委員 だったらいいのですけれども、先ほどおっしゃっていた選択制というものを導入すると圧縮されるし、実践活動を入れる時間も出てくるしというので、こういうものを作りたいたい人というパターンに分けて選択制はありかなと思ったので、まだ引き続き話をする場があれば、それはしたい。

今、思いついたのですけれども、企業さんに広報を手伝ってもらうことというのは可能なのですかと思ったのです。今はやっていないみたいですが、とある企業は社内でボランティアリーダー育成みたいなことをずっとやっていらして、それで経験者が結構いたりもするのです。30代、40代というのは、あわよくば自分が仕切っていこうかなと思える、まだリーダーになりたいと思える世代で、社会でばりばり働いている。そういう人にアプローチするのだったら企業の中のボランティアをやろうとしている社会貢献部というところから発信してもらうのもありかなと思った。あと、グリーンシップ・アクションに参加している企業さ

んとかもそれなりに関心はあると思うし、毎回参加している人がいればそこは狙い目かなと思う。

○野村座長 小野さん、よろしいですか。

○小野委員 大丈夫です。やる以上は効果を出したいと思っている。そのために時間とお金を使っているの、効果がなかったら私はやめてしまったほうがいいと思うのです。だから効果が出せるように頑張ります。

○野村座長 それでは、最後に今後の委員会の予定とか、あと、事務局からの伝達事項がもしありましたらお願いしたいと思いますが、よろしいでしょうか。どうでしょうか。

○事務局 今年度の委員会に関しましては、あと1～2回程度予定しておりまして、引き続き内容についての御意見をいただきたいと思っておりますので、よろしくお願ひいたします。日程の調整に関しましては、改めてまたメールのほうでお送りさせていただきますので、日程調整に御協力よろしくお願ひいたします。

○松岡緑環境課長 いいですか。

○事務局 以上です。

○野村座長 それでは、以上で第1回の指導者育成委員会の議題のほうを締めたいと思ひますけれども、よろしいでしょうか。

○松岡緑環境課長 はい。

○野村座長 では、事務局にお返しいたします。ありがとうございます。

○松岡緑環境課長 それでは、野村座長、ありがとうございました。今後も引き続きどうぞよろしくお願ひしたいと思ひます。

本日はお忙しい中、まことにありがとうございました。